

122号の特集でお届けしたエッセイ「Reading for Pleasure」。123号からは3回シリーズで毎回1冊ずつの本を取り上げながら、読者の皆さんを洋書の旅へとご案内します。

洋書シリーズ

Reading for Pleasure②

洋書への旅を始めるときの最高の一冊

水野邦太郎（福岡県立大学）

ジョニー・デップ主演の「チャーリーとチョコレート工場」という映画を見た人はたくさんいると思います。原作者はRoald Dahlというイギリスの作家で、あの宮崎駿監督はDahlのファンだそうです。私もDahlの書いた作品が大好きで、ほとんどの作品を読みました。その中で一番好きな作品、『Matilda』を紹介いたします。大きめの書体で書かれ、生き生きとした挿絵が豊富に入っていて、英文も易しいため（TOEIC 500点～）、Reading for pleasureにピッタリです。

ただ240ページあるので、原書を読む前に、その映画版をダイジェストにまとめたPenguin Readers level 3の『Matilda』をまず読んでみることをお勧めします。37ページの長さで、原作の奇想天外なストーリーの展開を十二分に味わえます。使われている単語は1200語（中学3年生レベル）なので、英文をスラスラ読めることがどんなに楽しいことか、身をもって経験できるでしょう。そして、「読み通せた！」という充実感で一杯にしてくれることでしょう。その成功経験と自信が、次の一冊、さらに原書を読むモチベーションにつながっていくはずです。そこで、Penguin Readersの『Matilda』から私の好きな場面を一つご紹介させていただきます。

マチルダは5歳半なのに複雑な掛け算をあっという間にやってのけ、あのディケンズやヘミングウェイの小説も読んでしまう天才少女。そのことをマチルダの担任のミス・ハニーが両親（Mr. & Mrs. Wormwood）に伝えたくて家庭訪問をします。その場面が次のように描かれています。

‘I think that Matilda will probably be ready to go to university in two or three years from now, with the right teaching,’ she said. ‘And—’ ‘University?’ shouted Mr. Wormwood. ‘Nobody learns sensible there!’ ‘That’s not true,’ said Miss Honey. ‘But I can see that we’re not going to agree about this.’ And she got up from her chair and walked out of the house(p.18).

3人の会話の具体的なやりとり（pp.17-18）を読むと、両親とミス・ハニーの人生観や教育観に天と地ほどの差を感じます。しかし、ミス・ハニーの ‘I’m going to do something for this child’ という言葉から分かるように、教育の可能性を信じ、マチルダだけでなく生徒一人ひとりの才能を伸ばしてあげたいというミス・ハニーの教育への情熱が、物語全体に醸し出されています。

しかし、両親と並んで、女校長が大の子ども嫌い、ミス・ハニーの生徒たちに「これでもか！」と言わんばかりに意地悪と暴力を振るってきます。ミス・ハニーは子どもたちを必死に守ろうとします。ところが、ミス・ハニー自身も、校長からひどい仕打ちを受け続けてきた事実をマチルダは知るのである。なぜミス・ハニーが校長からいじめられてきたのか、そのことをマチルダはどのようにして知るのであるか、それは読んでからの楽しみです。2人が互いに恵まれない境遇の中で、心と心の友情を結びながら人生を切り開いて行く姿

が随所に描かれています。

一方、マチルダの校長に対する怒りと、ミス・ハニーや教室の仲間を救いたいという強い気持ちが天賦の才能と掛け合わさり、マチルダは校長に仕返しを開始します。そのやり方があまりにも奇想天外すぎて、読み始めたら止められないほどストーリーの展開にはまってしまうことでしょう。最後は、胸がスカッ！としてHappy endで終わります。Reading for pleasureへの旅を始めるときの最高の一冊としてPenguin Readersの『Matilda』を自信をもってお勧めします。



● PROFILE ● (みずの・くにたろう)

1967年生まれ。千葉県出身。福岡県立大学人間社会学部准教授。Saint Michael's College 卒業。慶應義塾大学・上智大学非常勤講師、茨城大学 大学教育センター 総合英語教育部准教授を経て、2008年より現職。専門はTESOL（英語教授法）。2010年4月に、筆者監修の本『大学生になったら洋書を読もう』（アルク）を発売。